

川上幸治郎先生を偲んで



名城大学名誉教授川上幸治郎先生は平成9年（1997）10月20日午後2時4分、老衰のため愛知県春日井市内の病院で死去され、当年95歳の長寿を全うされました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

川上先生は明治35年（1902）鳥取県日野町でご誕生になり昭和2年（1927）に京都帝国大学農学部を卒業され、農林省鴻巣試験場技手、岩手県立農事試験場技師、満州国開拓研究所研究官、東亜農業研究所研究員、農林省開拓研究所農林技官、兵庫県立農科大学教授、昭和37年（1962）4月から1年間、フランス共和国、国立農業研究所の要請で渡仏され、ヨーロッパの風土と品種についてバレイショの退化の生理学説を実証し、世界的な評価をうけられました。

昭和43年（1968）からは名城大学農学部遺伝育種学研究室教授として迎えられ、昭和45

年～47年（1970～1972）まで農学部長、同年より昭和51年（1976）まで学長を務められ、大学の教育発展とバレイショの研究に生涯をささげられました。

先生は「ジャガイモの退化の生理学説」により昭和25年（1950）日本農学会賞を受賞され、この学説はバレイショの退化現象は種芋の加齢によるものであることを世界で初めて明らかにしたものであり、その後のバレイショ生産に大きく貢献され、昭和50年（1975）に勲二等瑞宝章を受章されました。

先生はバレイショの研究に更なるご尽力をされ、アリーローズ×フィーリアの三倍体である赤色のバレイショ品種「アンデス」の育成に成功され、その後昭和56年（1981）に日本馬鈴薯研究会を設立主催され、会長として機関誌『ポテトサイエンス』を発刊され全国の学術機関、民間団体の研究者の指導、研究交換にご尽力されました。

また亜細亜馬鈴薯研究会で会長を併任され、昭和60年（1985）10月に第一回亜細亜ならびに日本馬鈴薯研究会を長崎県諫早市にて盛大に開催し成功させましたが、この会はアジアのみならず世界20ヵ国より80名余りの参加があり、バレイショ研究者の国際交流に寄与されました。平成3年（1991）7月には第二回日本馬鈴薯研究会を八ヶ岳中央農業実践大学校（長野県）で開催され、全国より50名余りのバレイショ研究者、賛助会員の参加があり大成功を納められました。

平成7年(1995)、第三回日本馬鈴薯研究会を広島県にて開催する予定でしたが、先生の体調の悪化の為、開催を延期し翌平成8年(1996)に愛知県で開催予定でしたが、研究会会員数が年々減少の一途をたどり開催を断念せざるを得なかった事が残念でなりませんでした。

先生と私との出会いは今から17年前のことと思います。先生は学長の任期を終えられ研究室を農学部から農場へと移されました。そこで私はバレイショ研究の世界的権威と聞き、作物部でバレイショを栽培している私にとってすばらしい学識の持ち主だと思い、『私、バレイショの研究がしたいのでご指導をお願い出来ませんか』とお願いしたところ『僕と一緒に勉強しよう』と快く引き受けてくださったのが私と川上先生との共同研究の始まりでした。

君も十年過ぎると種芋を見ただけで収量がわかるようになる、と言われ半信半疑で始めました。まず最初に肥料試験を課題にし、その時先生が、まとめ上がったものは機関誌でもある『ポテトサイエンス』に載せておく、と今後の為になるとおっしゃった事を良く覚えております。これが先生の指導の許で初めて書いた私の論文でした。

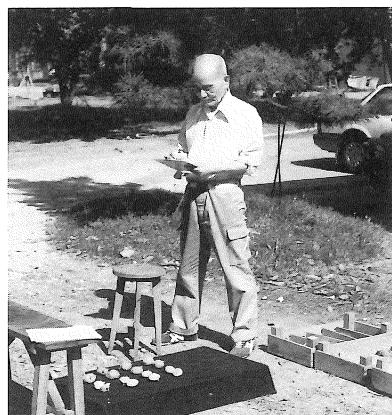
その後、予措試験を研究課題とし先生に相談したところ、それはおもしろい発想だと賛同を得、先生の指導のもとで書き上げる事ができ、この論文が第一回亜細亜馬鈴薯研究会における私の初めての研究発表となり、先生への感謝の言葉は尽きませんでした。先生はこの後、密度試験、種芋セット試験そして、種芋のサイクル試験にとり組まれ、このサイクル試験というのが先生の生涯で最後の課題

となってしまいました。また私たちの大学の農場は愛知県にあり、春作、秋作と年二作の地域で、バレイショ産地の夏作試験ができないと先生に相談すると、北海道まで行かずとも長野県で青森県ぐらいの気候が得られるとの事、そこは八ヶ岳中央農業実践大学校(標高1,300m)でありました。

そのころは先生の体力もあり、実践大学校に先生と共に1982年～1993年迄、試験データを取りに訪れましたが、その後体調をくずされ、以後の夏作試験は私一人で出掛けることとなりました。

川上先生の晩年は腎不全を患い入院され、二日に一度人工透析を受ける日々でした。先生は入院中にも関わらずポテトサイエンスの事を気にかけておられ、何度か私も病院へ出向き先生の指示を仰ぐ事がありました。また先生は病院から外出され亜細亜馬鈴薯研究会運営のご指導をされる事も少なくありませんでした。これらの事を療養中の先生にご心配をかけた事は私の不徳の致すところにはなりません。

そして今年平成10年2月(1998)川上先生の追悼の意を含め、川上幸治郎博士追悼、第三回日本馬鈴薯研究会を開催し、鈴鹿国際大



学国際学部長で川上先生のご子息であられる
剛太郎氏のご尽力で、鈴鹿国際大学学長の勝
田氏、名城大学学長の網中氏、八ヶ岳中央農
業実践大学校校長の井上氏、その他多数のご
参加をいただき、故川上幸治郎先生、故高山
昭康先生の功績をたたえと共に川上先生最
後の研究課題でもあるサイクル試験を微力な
がら私がまとめ今までのご指導のおかげで何
とか成果を上げることが出来ました。研究会
では第二回研究会の思い出のビデオなどを上
映し今後の日本馬鈴薯研究会の運営について
討議などをし、無事研究会を閉会することが
できました。

私と先生の最後の思い出は病院にお見舞い
に行きましたところ『ありがとう よく来て

くれた』とおっしゃったことで、先生も一人
で寂しかったのかと思うと悲しい気持ちにな
りました。

先生のご遺体はご親族にて密葬の上、ご遺
志に則い医学研究に献ぜられました。平成9
年11月18日に故川上幸治郎儀、天皇陛下御裁
可ならびに閣議決定により正四位勲二等に叙
するの御沙汰を受けられました。これもひと
えにご生前の功績が認められたことと思いま
す。

贈り名は知積院楚岳幸齡居士。

ここに故人のご功績と面影を偲びながらご
冥福をお祈り申し上げます。

(名城大学農学部 片山好春)

煮崩れとでん粉価

物理的な食感、肉質と煮くずれの程度に関
係し、調理方法と料理の種類により評価が変わ
る。おでんには粘質で煮くずれないことが、マッ
シュポテトには粉質で肉がくずれ易いことが望
まれる。

品種により煮崩れ程度は異なり、同じ品種で
はでん粉価が高いほど煮崩れは多くなる。同じ
でん粉価の品種間で比べると、「メイクイン」
は「男爵薯」に比べ煮崩れ難いが、でん粉価が
14.0%を越えると煮崩れる。同様に「ホッカイ

表1 維管束付近の細胞の大きさ (μm^2)

品 種 名	維管束外側	維管束内側
キタアカリ	447	483
メイクイン	349	402
ホッカイコガネ	290	293

コガネ」は、17.5%を越えると煮崩れる。一般
的には完熟してでん粉価の高い馬鈴薯ほど品質
に優れるが、煮崩れない特性によって販路を有
する品種では、むやみにでん粉価を高めない栽
培管理も必要である。

煮崩れの少ない品種ほど肉質がなめらかで粘
質の傾向があるが、細胞の大きさを調べると煮
崩れが少ないほど小さい傾向がある。

いも内部のでん粉価の分布は、皮層部が高く
内部ほど低い。同じ程度のでん粉価であっても、
「キタアカリ」は表皮部分がもっともでん粉価
が高く、中心部との差が著しい。これに対し
「ホッカイコガネ」は皮層部のやや内側のでん
粉価が高く、「キタアカリ」ほど中心部との差
が大きくない。でん粉価の分布は煮崩れ方に関
係すると思われ、「キタアカリ」はいもの外側
から崩れるが、「ホッカイコガネ」は全体が同
時に崩れる。(森 元幸)